序　章　研究史と争点……1

はじめに……1

一　漢字圏における言語的近代……2

二　聖書翻訳によるハングルの再発見……4

三　近代メディアとしてのハングル……6

四　日韓翻訳研究の現在……7

五　本書の構成……10

第一章　言語：God の翻訳……13

一　日本における神とかみ……13

二　在朝鮮宣教師間の用語論争……18

三　God の朝鮮語訳……28

四　漢字に対する仮名とハングルの異なる位相……32

第二章　文学：宗教小説の翻訳……35

一　二つの漢訳——文言訳『天路歴程』と
官話訳『天路歴程官話』……35

二　官話訳から朝鮮語訳『텬로력뎡』へ……37

三　東アジアにおける『天路歴程』の受容……48

四　前近代の翻訳論の活用……57

第三章　メディア：キリスト教新聞における言文一致と読者層……59

一　小新聞における「俗談平話」的な志向……59
二　『七一雑報』の編集方針——平易な文体への志向……65
三　漢語の借用と俗訓……71
四　言文一致の試み……79
五　宣教師の啓蒙的編集方針と日本の知識人の読者との間の緊張関係……84
六　近代朝鮮における共同体的読書……102

第四章　知識人：李樹廷訳聖書の文体……111

一　日本滞在間(1882-1886年)における李樹廷の軌跡……111
二　漢字表記による造語力と視覚的効果……136
三　在日宣教師ルーミスの書簡に見る李樹廷の翻訳観……142
四　漢語の翻訳——朝鮮で通用する漢語への変換……147
五　朝鮮宣教における漢字ハングル交じり文体の有効性……151

終　章　翻訳と日韓の近代：結論と展望……157

参考文献　165
あとがき　191
索　引　195